

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
 (Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124



何故こんなにも成功したのだろうか

大図研大学『情報管理論』を終えて

竹村 心 (大図研大学事務局)

連続7回の大図研大学「情報管理論」は4月23日開かれたオプション「立命館大学びわこ・くさつキャンパスメディアセンター見学会」で無事終了することができました。

これも、お忙しい中、近畿の大学図書館員の継続教育のために、快く講師を引き受けて下さった同志社大学・大城善盛先生、三重大学・柴田正美先生のお力添えの賜物です。

「大学」事務局として改めて感謝致します。そして、何よりも、「大学」を支えて下さった69名の熱心な受講者の皆さんのお陰です。ありがとうございました。

今期大図研大学は大学図書館にとって情報とは何か、大学図書館にとって情報を収集、加工・蓄積し、提供する、即ち、情報を管理するとはどういうことなのかを、あらためて考える企画でした。

オカタイ企画である大図研大学『情報管理論』がのべ255名もの受講者を集め、今どき、なぜこんなにも成功したのでしょうか。それは第1に近畿の大学図書館員にもっといい図書館員になりたいという継続教育の要求があったこと、第2に、大学図書館員の継続教育として、テーマが適切であったこと、第3に、テーマにふさわしい講師であったこと、第4に、受講者に講義の評価をしてもらうなど、受講者中心の運営に徹したことではないでしょうか。その足跡は以下の通り(次頁へ)。

本号は大図研大学特集号!!

何故こんなにも成功したのだろうか (竹村 心)	1~2頁
大図研大学「情報管理論」を終えて (大城善盛)	3頁
私自身がブラッシュアップされた (柴田正美)	4頁
大図研大学「情報管理論」に参加して (織田裕行)	7~8頁

第1回「現代社会における大学図書館」(10月24日・大城先生)

大学教育の目的は学ぶことを学ぶ、即ち、情報リテラシーを身に付けることであるとし、利用者教育を具体的に展開。43名受講。受講者の満足度96% (アンケートによる)。

第2回「情報管理概論」(11月24日・柴田先生)

利用者が何を情報として認識するののかを知ること、利用者のアクセスする方法を熟知することが情報管理の基本であると主張。受講者31名。満足度98%。

第3回「データベース概論」(12月12日・大城先生)

データベースの基本構造を分解・解析し、図書館員ならデータベースをブラックボックス視してはいけないと忠告。42名受講。満足度78%。

第4回「データベース利用の実際」(1月23日・柴田先生)

多種多様なデータベースの出現は検索担当の図書館員の力量が益々問われていることを事例で証明。受講者37名、満足度82%。

第5回「図書館システム概論」(2月20日・大城先生)

従来の図書館の考え方からシステムとしての図書館における蔵書構築、目録システム、情報サービス、ネットワーク、業務のコンピューター化、等の変容を具体的に展開。31名受講。満足度89%。

第6回「ニューメディア」(3月13日・柴田先生)

CD-ROMなどのニューメディアを使った情報管理は大学図書館にとっては機器管理でない。情報を仲介的に提供する大学図書館の機能をあらためて強調。その上に立ってそれぞれの媒体を批判的に評価。36名受講。満足度90%。

立命館大学びわこ・くさつキャンパスメディアセンター見学会(4月23日・オジョン)

35名参加。立命館大学工学部の附属施設はなぜ、ライブラリーでなく、メディアセンターなのか。百聞は一見に如かず。是非ご覧あれ!!

最後に、簡単な大図研大学『情報管理論』の収支決算を報告します。

収入	392,000円	
支出	352,509円	残高 40,491円

残高は次回大図研大学運営経費に使わせて戴くことを第5回及び第6回受講者の皆さんに了解して戴きました。次回、装いを新たに大図研大学を開講します。乞うご期待!!

大図研大学「情報管理論」を終えて

大城善盛（同志社大学教授）

大学図書館研究会京都支部の事務局の方々から大図研大学「情報管理論」の計画をもってこられた時、司書課程で「情報管理論」を教えているけれども専門ではないからと一度はお断りをしたが、大学で教えているような内容でいいと言われて、結局、講師の役を引き受けることになった。そして、もう一人の講師である柴田氏も交え、3者で講習の時期内容等の計画を立てた。その結果毎月1回（正味3時間）6ヶ月の長期にわたって実施することとし、テーマは①現代社会における大学図書館、②情報管理概論、③データベース概論、④データベース利用論、⑤図書館システム論、⑥ニューメディア論、に決まった。

私は上記の①、③、⑤のテーマを担当することになった。最初の「現代社会における大学図書館」では、(a)現代社会の特徴、(b)現代社会における大学、(c)大学図書館を取り巻く環境の変化（大学図書館に関わる情報技術の進展、大学図書館の機能の変化、大学図書館のサービスの变化、大学図書館におけるマーケティングと評価の重要性）を取り上げて、全般的なイントロダクションを試みた。しかし、最初の講習日であり、受講生の把握も十分にはできていなかったため、余りまとまりのある講義ができず、時間配分もうまく行かない、悔いの残る講習であった。

（私担当の）2回目の「データベース概論」では、(a)データベースの定義と特徴、(b)データベースの種類、(c)商用データベースの流過程、(d)大学図書館におけるデータベースの利用状況、(e)データベースの評価等を取り上げて、データベース全般の理解を深めてもらうことを主眼とした。3時間で全般をカバーするように努めたが、データベースに関しては本も多く出版されており、多くの受講生が既に知っていることばかりではないかと一抹の不安を覚えながらの講義であったが、後のアンケートで一部の受講生を除いては役に立ったことが分かり安心した。

（私担当の）3回目の「図書館システム論」では、(a)システムの考え方、(b)図書館システムの考え方、(c)システム計画、(d)システム分析、(e)システム設計等について講義した。システムについては、これまた多くの図書が刊行されているが、私自身図書館システムについて明確な理解をもってなく、この機会を自分の知識を確実にする機会と捉えた。そのようなことで、「図書館システム論」では受講生も受け売りの講義をしているなど感じたのではないかと今思うと恐ろしいほどである。

とにかく、専門でなかったため、今度の講習会では準備のために結構多くの文献に眼を通した。この講習会で1番勉強になったのは私自身ではなかったか、と今振り返ってみてそう思うのである。

最後になりましたが、大学図書館を取り巻く環境の変化は著しく、大学図書館員はその変化に対応していくために研修の場を切実に望んでいると感じられた。研修計画をうまく立てれば、すなわち、テーマ、時期、講師の選択に間違いがなければ、受講生がいるかどうかの心配をする必要はないと感じられた。大図研、もしくは、その京都支部がわが国の大学図書館の発展をめざして今後も研修会を計画されることを期待したい。

私自身がブラッシュアップされた

—『大図研大学・情報管理論』を終えて—

柴田正美 (三重大学教授)

1 謝辞

普通の文章では、このような見出しが最初に来るわけがない。けれども私としてはこの短文を始めるにあたっては、こうしたことから書き始めないと収まらないと感じている。

『大図研大学・情報管理論』を構想され、受講者を組織し、会場を準備し、あまつさえアフター行事までを企画・運営された竹本・竹村の両竹さんに感謝を捧げたい。また、単に受講者として受け身に聴くのではなく、積極的に内容に関わりを持つとされ、私に多くのサジェッションを与えてくれた受講者の皆さんにもお礼を申し上げたい。

2 どんなことを話したか

詳細の内容については、受講された皆さんが会員の周りにはいるだろうから聞き取っていただきたい。そのことが自発性ある研修の機会ともなるだろう。ここでは文字通り「概論」であった「情報管理概論」をのぞく2つのテーマについての項目だけを掲げておくこととする。

データベース利用の実際	データベースの種類 利用上必要となる検索システムの知識 データ構造 日本で利用できるオンラインDBシステム 利用を始めるにあたって システムに関する用語の比較 検索システムの基本コマンド比較 論理演算 トランケーション ストリング・サーチ 検索語一覧の表示 検索サービスの実施・手順 検索後のサービス おわりに—DBはブラックボックスでよいのか
ニューメディア概論	はじめに—高度情報化社会とニューメディア ニューメディアの定義 ニューメディアについての資料の在り様 ニューメディアのメディアにおける位置づけと種類

ニューメディアの特徴
 情報環境の変化
 どのようなニューメディアがあるか
 電子出版とニューメディア

講義は、いずれも午後半日を掛けてのものであり、大学の授業のように「わずか100分（これすら悪名高い「大学設置基準の大綱化」で値切れるようになった）」ではない。休憩を挟むにしても、適切にめりはりを付け、聴いてもらうにはそれなりの工夫をこらさざるをえなかった。

3 コンピュータを利用したプレゼンテーション

教室では実現が難しい、多くの研修会や学会発表で用いられている技術とは異なったプレゼンテーションはないかと考えて試みたのが、パソコンを利用したものである。「情報管理概論」では、セイコー電子工業社製のプロジェクションパッドシステム「大みえくん」を利用した。これはノート・パソコンのディスプレイ画面を液晶画面に映し出し、OHPの上に設置して拡大投影するものである。OHPのシートを置く部分が出来る限りフラットで広いという条件が求められるが、投影そのものは実現することができた。しかしながら、OHPの照明能力が不十分で、後ろの方の人には読み取れるものではなかった。

「データベース利用の実際」では、竹本さんの努力で、教室備え付けのラップトップ・パソコンを利用することができた。このシステムは、パソコンの画面をそのままビデオ映像としてスクリーンに映し出すもので、鮮明さは前者を遥かに越えるものであった。テーマから想像されるように、実際のデータベースを検索する過程を示そうとしたので、紙にコピーして配ったりすることが著作権上はばかられるものであろうと判断して試みたものである。この投影システムでの問題点は、データを作成するコンピュータと投影するラップトップ・パソコンとの間に互換性がなければならないことである。幸い、今回は共通するソフトウェアであったため実現できたが、[日本の〇〇]にばかりこだわっていると使えない局面も予想される。

プレゼンテーション・システムの課題を感じた次第である。

4 3回の講義で得たもの

大学の講義を進めているとしばしば空しさを感じることもある。それは、しゃべっている内容がどれほど理解されているのかを確認できない点であり、また学生達が聴きたいと考えているのに応えているのかどうかを知ることができない点である。もちろん、最初の講義にあたって「聴きたいことや講義の内容への希望」を調査し、それに応えるという努力を継続的にしているし、最終講義の段階で理解度をチェックするようにはしているがそれぞれの段階でこうした事実を知ることが非常にむづかしい。

今回の『大図研学校・情報管理論』では、聴きたい内容についての事前調査もキチンとなされており（もっとも、それに十分応えきったかどうかは自信がない）、毎回実施され

たアンケートを見て行くことにより理解度・充足度も知ることができた。ひとえに運営にあたった人達の賜物であろう。

私の場合、図書館の現場を離れて既に8年が経過している。その間に現場は学術情報センターシステムが予め与えられる条件として定着するようになった。このことに伴い情報に対する感覚や、データベース利用の環境は大きく変化している。さらに新しい情報環境としてのニューメディアへの関心が高まったと考えてよいだろう。

それらの条件および環境の変化を、今回の講義を進め、受講者の皆さんと質疑応答や懇親会の席でお話することによって明確に把握することができた。単に情報を伝える側として私が存在したのではなく、情報を受け取る立場にある人間でもあったという大きな収穫であったと感じている。私自身が研修を受けたと同様の効果を得ることができた。

〔生涯学習時代〕が叫ばれ、すべての人が継続的に学習をしなければならないとされている現代、私たち教職にあるものも同じであろう。なまじっか本来の職が〔教職である〕がゆえに、常に〔教える立場〕のみを認識させられている。しかし、研修の場も教育の場も、教える者が教えられる立場に立つ可能性を見据えない限りは、新しい展開が出てこないのではなかろうか。そのことを実感させてもらったのが今回の講義であった。

5 番外編—立命館草津キャンパス印象記

一言で表現するならば「これからの図書館員は大変だ」に尽きるだろう。入って目につくのが検索端末であり、ビデオ視聴も可能なワークステーションであることは、図書館のイメージを大きく変えさせる。しかもカウンターに立っている図書館員が、これらの機器を必要に応じてメンテナンスし、学生に対して適切な利用法の指導をせざるを得ない状況というのは、非常に大きなカルチャーショックであろう。こうした機器から取り出される情報についての認識も、図書館のもっていた〔蔵書〕の概念とは全く異なるものであり、その点においても図書館員は一大変革を強いられていると思われる。

次に指摘しておきたいことは、新着雑誌の扱いである。24時間利用可能、コピーは利用者の責任で行うこと、可能なかぎりオープンスペースに資料を展示すること、など従来にはないシステムが採用されている。利用者に十分な自主性が存在する場合は、かかる方針は大いに歓迎されるであろうが、利用方法に習熟していない利用者に対してまで、このままのサービスでよいのだろうか。やや疑問に感じた。むしろ、こうしたシステムを支えるためには、利用者に対する援助・指導を積極的に行えるような体制が準備されるべきだろうと感じた次第である。

同じく雑誌の24時間利用を保障してゆくには、あの部屋に、検索端末およびワークステーションを設置する必要があるだろう。研究者をはじめとする利用者は、ブラウジングのみを目的として雑誌室に立ち寄りとは考えにくい。資料および情報を求めて立ち寄り、手に入らなければ次善のものを求めて検索を始めたいと考えるだろう。その時に検索端末を求めて、自分の研究室にまで戻らなければならないとしたらどうだろうか。資料の開放も確かに必要であろうが、図書館において実現される機能のすべてが同時に利用できる体制になったとき、利用者は図書館の必要性を理解し、支持者になるという事実を厳粛に考えてほしいと思う。

大図研大学「情報管理論」に参加して

織田裕行 (京都大学附属図書館)

採用されて2年程の私は、大図研に所属していないせいもあってか、大学図書館(の問題)という、今でも国家公務員試験の専門科目(記述式)の問題について思い出してしまう。昨年は知らないものの、その前の3年分の論題はそれぞれ、大学図書館の「相互協力」「商用外部データベース導入時検討すべき問題」「利用者教育」について述べよ、であった。いずれもかなり職場の実状を反映した出題である。しかも(当然か?)今回の各講義の内容もこれらの「問題」とは関連している。どこの職場でも時差と重みの違いはあれ直面していることばかりであろう。数十分で終わる試験問題としてではなく、「現実問題」「実践の問題」として。

例えば第一回目の大城先生の「情報リテラシー」という語は、不勉強な私には耳新しい響きでもあり、主要業務の一つとして、独立のBI担当カカリをもつてもよい程の意義があるという主張については、受講当時は正直のところピンとこなかった。しかし今思えばなるほど確かに、と思ひあたる。なにしろ新学期を控えた4月に異動して環境が一変し、OPACの利用説明会ほか一連の「利用者教育」に携わることが多くなり、連日このことが頭を離れなかった。この場合の「答案」とは学生への効果であり、評価は利用者が行なうわけだが、まだ私は回答を始めたばかりである。利用者教育は今後も継続して関わる問題であり、手掛りを搜している。同じ日に若干述べられた「図書館におけるマーケティング」との関連についても、ようやく少し納得できるようになったか?という程度である。受講時を思い出し、もしあのときの話の内容が全部わかっていたなら今頃「模索」の前に「暗中」とはつかないのだろうか、と残念に思ったりもする。

今回の中心テーマといえるデータベースについても同様であるが、こちらは若干の使用経験から、話を聞いていても納得できる点は多かった。図書館で専門職として行なうためには、各DB、各ファイルの構造、内容についての理解が重要であるという柴田先生の主張は納得できることであり、当然そうでなくてはならない。話の内容もさることながら、興味は説明方法にあった。著作権上の問題を意識されてのようだが、ワープロのディスプレイをそのまま投影して検索事例に解説を加える手法は私には新鮮であり、画面が鮮明であれば効果的であろうと思った。

他の各回のテーマも、それだけで数回の説明が必要と思われるほどのものも含まれ、またつつこんだ方がより面白くなると思われるものばかりであった。「大学図書館をめぐる諸問題」として始めに列挙された事柄の多岐に渡ったことからみても、全6回で述べきれるものではない。正直のところアンケートで「期待したテーマが抜けていた」に印をつけたかったこともある。また各参加者のDB使用状況などについてもアンケート項目に加えていただければよかったかもしれないと今思う。

「図書館」とは単独の建物や組織を越えてネットワークで結合された、拡がりをもった活動それ自体のことではないだろうか?採用された時から既に、学情システムが当り前のような職場となっていたせいも、そのように考える。目録業務時に全国の方々の作成によ

る書誌を表示しその何(十)件目の所蔵館として登録する時、ILLで国内唯一の受付館と対面し「お願いします」とORDERコマンドを発する時、特に実感する。共通の問題もかかえているであろうし、もちろん個別の問題もある。だからこそ各館の実状や対応をもっと知りたい……私がそう思うだけではあるまいが。

4月の立命館の草津新キャンパス見学に参加した人達も多分、同じように思っていただろう。同じ名の温泉の歌ではないが一度は行きたかったし、興味をひく点や驚く装置がいくつかあった。構内資料の大胆な集約管理、それを補償する雑誌コーナーの設置形態(平面図を見た時から気になっていた)、CD-ROMサーバやVTR制御システム、理系の大講座を凌ぐWS群……生意気なことを言えば、直面する問題のそれぞれについて、現在における一つの回答を提出している、という姿勢が感じられた。見覚えのあるOPAC、RUNNERSも「進化」を遂げていた。話に聞く「湘南台」の「メディアセンター」もここと似た内容なのだろう。「図書館」からこのように呼ぶだけの内容が、無知な私にも伝わってきた。今後多くの図書館もこうした傾向に向かうのは避けられないのかな、となると……期待も不安も混ざる多少複雑な感想を持って草津を後にした。

(こうした見学会も含め9月来、お世話になった皆様、ありがとうございました。また近いうちにお世話になるかと思えます。なにしろ日常業務において各図書館は、いつも繋がっているのですから。)

● 大図研京都からのお知らせ ●

今年の全国大会は山口で!!

あの「おいでませ」
で有名な……

8月27日(土)～8月29日(月)に開催

スケジュール

全国大会は上記日程で開催されます。皆さん、今から日程の調整を!!